

今より一歩、
心地よい暮らしを考える。

7町エリア限定配布

ニ
ユ
ー
ト
ラ
ル
Neutral
News

No.03

太陽光パネル導入で見た 地域内循環の価値

となりのニュートラルは、ご近所のあの人が取り組んでいる、暮らしを豊かに心地よくし、環境にもやさしい工夫をお伝えします。今回お話を聞きましたのは、「studio36 一級建築士事務所」共同代表の畑克敏さん。複合施設「偶偶（ぐうぐう）」の屋根に太陽光パネルを設置した体験と、その過程で気づいた課題について伺いました。

きっかけは
脱炭素先行地域の補助制度

畑さんが太陽光パネル設置を検討するきっかけとなったのは、岡崎市が脱炭素先行地域に選ばれたことでした。「市から事業者で太陽光パネルの設置ができることを知りませんか」と相談を受けて、なかなか手を挙げる人がいない中で、それならここでやってみようかということになりました」と畑さん。建築設計を生業とする立場から、太陽光パネルについても理解を深めたいという思いもあったといいます。

となりの
ニュートラル

しかし、実際に検討を始めると様々な課題に直面しました。「メーカーもよく分からないし、中国製がいいのか日本製がいいのかも分からない。イメージしていたラインナップと、実際は状況が大きく変わっていました」と畑さん。強化ガラスタイプからフィルムタイプ、さらにはその中間のフレキシブルタイプまで、選択肢の多さに戸惑ったそうです。3社の業者から話を聞いた結果、うち1社は概算見積もりでパネルが屋根からはみ出してしまい設置不可能。「Google Earth」(グーグルアース・地図アプリ)の写真だけで見積もりを出していて、現地調査なしの段階では精度に限界があることを実感しました」と振り返ります。最

最終的に、古い建物でも安心な軽量のフレキシブルタイプを採用し、1.4kWのパネルを設置しました。

蓄電池の重要性

導入後に気づいた大きな課題は、発電した電力の多くを売電してしまっていることでした。「日中あまり電気を使わないので、10円で売電している一方で、夜は33円で電気を買っている状況です」と畑さん。自家消費できれば33円の価値があるものを10円で売ってしまうことで、投資回収期間が想定3年から9年に延びてしまったといいます。

「蓄電池が高いと思っていましたが、入れておいた方がよかったです。特にここはシェアキッチンで夕方5時頃から稼働するので、昼間発電した電力を蓄電池に貯めて夕方以降に使えば効率的でした」と後悔を込めて語ります。現在は蓄電池の後付けを検討中で、6月から始まる予定の行政の補助金メニューでの導入を計画しているそうです。



地域内で お金を循環させる意義

畑さんが太陽光パネル設置で最も重要視するのは、地域内でのお金の循環です。「1世帯あたり年間約65万円を海外からの燃料輸入に使っているそうですが、自分で発電した電力を使えば、その浮いたお金を地域内で循環させることができます」と地域での経済活動意義を強調します。

「パネル自体は輸入品かもしれませんが、設置する電気工業者は地元の方。地域内で仕事が生まれ、お金が回る」と地産地消エネルギーの価値を語ります。

また、畑さんは太陽光パネル導入を今後広めていくうえで、「保険の窓口のような、メーカーに偏らない総合的な相談ができるコンシェルジュのような存在が必要」と指摘します。建物の構造、生活スタイル、蓄電池の必要性など、総合的に判断できる相談窓口の重要性を実感したそうです。

地域のお金を地域で循環させる。畑さんの太陽光パネル導入体験は、単なる省エネ設備を超えた、地域経済活性化の視点を教えてくれました。「チェーン店もいけれど、地元の個人店で食事をするのと同じ感覚。どこにお金を払うかで、自分が応援したい地域の姿が決まってくる」という言葉に、持続可能な地域づくりのヒントが見えました。



studio36 共同代表 畑克敏さん

岡崎脱炭素計画 ロゴマーク

岡崎市は、地球温暖化の原因である二酸化炭素の排出量を削減し、ゼロカーボンシティの実現を目指しています。再生可能エネルギーの活用や省エネルギー化を推進して二酸化炭素の排出量を減らし、緑化を推進して二酸化炭素の吸収量を増やしていく、こういった脱炭素の取り組みを進めています。

地球温暖化などの環境問題は、市役所だけでなく、岡崎市に暮らす人や働く人、みんなが一体となって長期的に取り組んでいく必要があります。そこで、みんなが同じ方向を向いて進んでいくためのシンボルとなるロゴマークをつくりました。

「岡崎脱炭素計画」この言葉には、多くの方と一緒に岡崎市を脱炭素化していくという意図を込めました。

「雲」煙「魚」木「コン」セント「電」気「水」車「地球」温暖化の主な原因である二酸化炭素や、気候変動による異常気象、生態系への影響を連想させるイラスト。

また、子どもから大人まで誰もが親しみを覚えるよう、ロゴの文字に岡崎市の象徴となるものを飾り付けています。「岡」の文字の上部には岡崎城のシャチホコを模していますし、「炭」の文字の中には、岡崎公園の桜をイメージした桜の花びらが描かれています。そして、計画の「画」の文字の

中央には、伝統産業「三河火花」の美しい光を入り込み岡崎市らしさを体現するものに。

ロゴを見た方が、地球環境への思いを馳せるとともに、岡崎市の魅力を再確認することで、このまちを環境にやさしい心地よいまちへしていこうと思ってくただけると嬉しいですね。

今後、このロゴマークを様々な場面で活用していきますので市民の皆さまの目に触れる機会も増えることと思います。ぜひ、このロゴマークを見かけたら、未来の岡崎市をより良いまちにするために何ができるかを考えてみてください。

また、このロゴマークは事業者の皆さまにもご活用いただけます。環境に配慮した取り組みを行っている方々には、ぜひこのロゴマークの活用をご検討ください。ロゴマークの使用に関する手続きの詳細は、市HPにてご案内しております。

このロゴマークが、ゼロカーボンシティへの道のりを市民の皆さまと共有するきっかけとなり、脱炭素への意識を高め、行動の輪が広がることを期待しています。



まちなかニューtral

履物修理で使い捨てから長く使う文化を支える老舗下駄屋

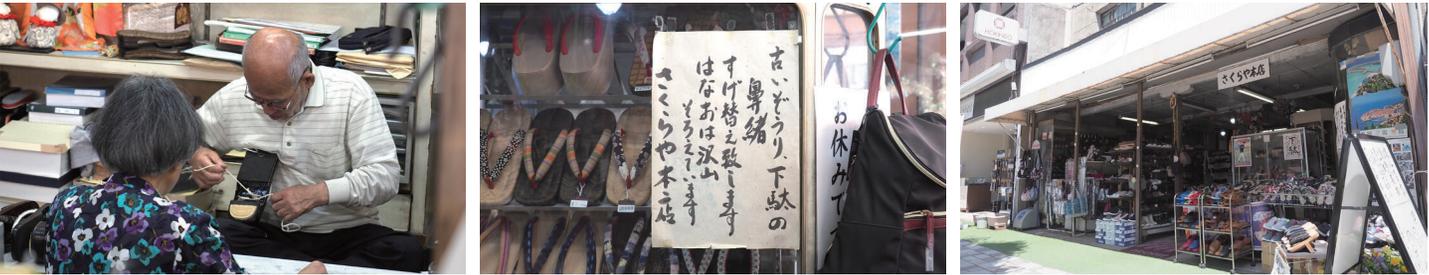
ここでは、まちなかにあるちよつと環境を考えた身近な取り組みを紹介いたします。今回は、康生通で履物の販売や修理をおこなう「さくらや本店（以下：さくらや）」。

さくらやは、大正10年頃に創業した100年を超える老舗で、現在は3代目の伊藤進朗（のぶあき）さんが履物の修理を中心に営んでいます。草履や下駄の鼻緒の交換、補強など、壊れたり古くなった履物を捨てずに長く使えるよう修理しています。

市内には以前多くの履物屋がありましたが、時代の変化とともに廃業する店が増え、現在では鼻緒の修理をおこなう店はほとんどなくなりました。そのためさくらやには豊橋や名古屋など遠方からも修理の依頼が訪れ、お客様がスマートフォンで「履物修理」を検索して来店するケースも多くなっているそう。

特に50代前後の着物を着る女性からの修理依頼が多く、ネットなどで購入した古い履物の修理相談も増えています。昔の草履は天然素材でできているため、最終的には自然に帰ることができる環境に優しい履物です。

壊れたら買い替えるという現代の消費スタイルとは対照的に、さくらやの修理技術は履物を長く大切に使う文化を支えています。一つひとつ手作業でおこなう修理は時間がかかりますが、物を大切にすることを環境への配慮を実践している取り組みです。



岡ゼロニュース

こんにちは！岡崎市役所ゼロカーボンシティ推進課です！

暑い日が続いていますが、みなさま体調を崩されたりしていませんか？この時期に怖いのが熱中症です。岡崎市では熱中症対策のため、冷房設備があり、ベンチ等で休憩できる施設をクーリングシェルターとして開放しています。こまめな水分補給、涼しい場所でのひと休みが熱中症予防につながります。暑い時期のお出かけの際に、ぜひクーリングシェルターをご利用ください。対象施設は市HPでご確認ください。

また、みんなでエアコン（涼）をシェアする、こうした取り組みをクールシェアといいます。日中を公共施設や商業施設など自宅以外の涼しい場所ですること、家庭でのエアコン使用量が抑えられ、節電につながります。節電は地球温暖化の主な原因である二酸化炭素排出量の削減にもつながります。

家庭におけるエアコンの電力消費の割合は、夏場では約60%と言われております。ご自宅のエアコンも、定期的なフィルター掃除や適切な温度設定をすることで省エネ効果・節電効果を高めることができます。賢くエアコンを使用して、お財布にも環境にもやさしく、暑い夏を健康に乗り越えましょう！

クーリングシェルターについて



発行元 ニュートラルニュース実行委員会
岡崎市ゼロカーボンシティ推進課
発行月 2025年7月
印刷 合資会社永田印刷所
企画・編集 Micro Hotel ANGLE（合同会社シテン）
ライティング Micro Hotel ANGLE（合同会社シテン）
デザイン 岡田偉大（ケルン）

バックナンバーはこちら



ニュートラル
ニュース
とは

地域情報紙「ニュートラルニュース」は、QURUWA 7町エリア（亀井・籠田・連尺・東康生・南康生・唐沢・伝馬一丁目）で暮らす人や働く人たちの「今より一歩、心地よい暮らし」についてお届けします。そして、実はそれが環境にやさしい取り組みで、その輪を地域に少しずつ広げることを目指します。